

この頃から、いろいろなそろばんの本がではじめた

貨幣経済の発達、商業活動の隆盛にともなって、計算を必要とする人が多くなると、そろばんの本もたくさん発行されるようになりました。この時代には、再版されたものを除いても次のようなものがあります。

寛永5年(1628) 天理大蔵の算用記

寛永16年(1639) 豎亥録

寛永17年(1640) 因帰算歌

寛永18年(1641) 新編諸算記

寛永20年(1643) 万用不求算

承応元年(1652) 新刊算法起

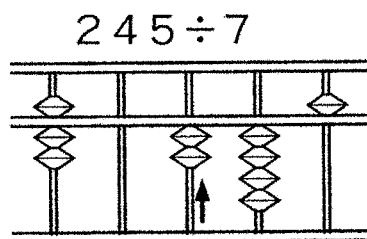
承応2年(1653) 参両録

明暦3年(1657) 算元記・円方四卷記・格致算書

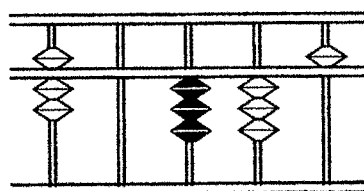
万治2年(1659) 改算記・算法闕疑抄

亀井算が生まれる

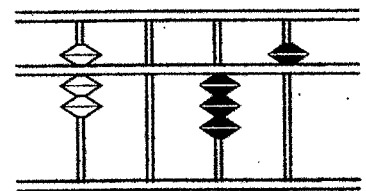
この頃のわり算はわり算九九を使って商を求めるのが一般の方法でしたが、百川忠兵衛の「新編諸算記」(寛永18年 1641)の中で初めてわり算の商をかけ算九九で求める方法が書かれました。これを亀井算といいます。この亀井算の方法は、現代の商除法とは商を立てる位置が1桁右に置くところが違います。次のように計算します。



三七21と20を30にして1ひく



五七35と30を50にして5ひく



商 35